

吉益家門人録の考察

町 泉寿郎

日本医史学雑誌第四十七巻第一号 平成十二年四月十四日受理
平成十三年三月二十日発行 平成十二年七月十五日受理

〔要旨〕 呉秀三旧蔵『吉益家門人録』（東京大学医学図書館所蔵）を、従来報告されている二種の「吉益家門人録」（矢数道明所蔵「奥田本」「深川本」と比較検討した結果、呉本は収録人数において最多であり、各人の情報の質と量の点でも最良で、他の二本が呉本に付加できる情報は少ないことがわかった（以上、II章）。次に、鶴田元逸（東洞門人、門人録編纂着手者、書題命名者）撰文「通刺記序」の翻刻・注釈・現代語訳を掲げた（III章）。次に吉益塾の軌跡を考察した。まず東洞初期門人（門人録に年記を欠く）の入門時期を考察した（IV章一節）。次に呉本南涯門に見られる切り継ぎ訂正を、寛政・享和期の京都・大坂二塾併存に起因するものと考え、大坂塾と南涯の弟羸齋の関係にも言及した（IV章二節）。最後に各年入門者数をグラフにし、出身地別・年代別入門者数を表にして示した。入門最多年は文化三年で、その前後十数年が吉益塾極盛期であることがわかった。出身地別構成は上位から順に近畿（28～30%）、中国（21～25%）、中部（15%内外）、四国（10%内外）、九州（10%内外）、東北（10%弱）、関東（5%内外）の結果となった（IV章三節）。

キーワード——吉益家門人録、呉秀三、奥田本、深川本、鶴田元逸

I 緒言

著者はこのたび、古方医学の名家・吉益家の門人録を、東京大学医学図書館呉秀三文庫中に見出した。従来、吉益家門人録については、矢数道明架蔵の二種類、いわゆる奥田本⁽²⁾と深川本⁽³⁾が同氏によって活字翻刻されてよく知られている。今回の呉秀三文庫所蔵本（以下「呉本」と略称）はそれとは別本であり、以前から出現の待望された本であった。以下、検討を加えるごとく、呉本は先ず収録数において奥田・深川両本を大きく上まわり、かつ記載内容の資料的価値が最も高い。門人録原本が出現しない限り、呉本は吉益家門人録として最も信憑するに足る資料と言い得る。本稿とは別に全文を活字翻刻する所以である。しかしながら著者は呉本の出現をもつて奥田・深川両本の価値を否定し去るものではない。呉本もまた筆写時の誤脱を完全には避けられない以上、両本には先ず校訂資料としての価値がある。そこで今回、呉本を活字翻刻するにあたり、奥田・深川両本との校合作業を詳細に行った。その結果、吉益家門人録と吉益家塾についていくつかの新知見が得られ、また従来⁽¹⁾の報告に訂正すべき点が見出されたので、ここに報告するものである。

II 諸本の検討

一、奥田本

①「概要」矢数の報告によれば、奥田鳳作（一八二一—一八四九、常陸国真壁郡河内村奥田〔現茨城県下館市〕の医家、岑少翁門の磯野弘通の門人）の編纂にかかり、鳳作の玄孫から安西安周の手に渡り、安西没後、矢数の所有に帰した。杉立義一が、安西が吉益家門人録をかつて蔵したことを知り、その後の消息を「東京教育研究所（※著者注—国立教育研究所）の両全文庫（※安西安周の室号）にあるといわれる」と推定した本はこの矢数架蔵本にほかならない。

収録人数は東洞門五八二人、南涯門三一九人、北洲門一一三人、計一〇一四人とされる。出身地別に編集している点

に特色がある。だが再編資料のために入門年時を全く欠く点は資料価値が低い。かつ南涯・北洲門は東日本(三・遠・駿・甲・豆・相・武・房・総・常・信・上・野・奥・羽・尾・勢の各州と越後)のみを抜萃したものである。

②「収録人数の補訂」総体的には呉本は他の二本に比して網羅性において優る。唯一の例外は奥田本の東洞門人録(五八二人)が呉本のそれ(五四三人)を大きく上まわることである。そこで奥田・呉両本の東洞門人録をまず逐一対照してみた。すると奥田本137〜150(武州)、212〜228(奥州)、252〜254(若州)、567〜581(日州)の計四九人が呉本東洞門には記載されず、実は南涯・北洲門人が混入したものであることがわかった。137〜150の一四人が北洲門人、それ以外の三五人は南涯門人である。次に、奥田・呉両本の南涯・北洲門人録を検討すると奥田本は南涯三二九人、北洲一一三人と呉本(呉秀三報告によれば、南涯門一四二二人、北洲門六七五人)より遙かに少ないが、これは東日本に限定した為である。奥田本南涯門の奥・若・日州と北洲門の武州に不足があるが、前記の東洞門混入分がこの不足分に相当しており、これを補えば遺漏は少ないことがわかった。ほかに南涯門人が誤まつて北洲門人となっている例(17・297)、その反対の例(209)がある。東洞門(296・329⁵)と南涯門(204・208)に重出が見られる。

次に国別の配当のしかたに問題はなかったか検討すると、南涯門53・59は本来参州に配当されるべきものが誤つて遠州に入っている。なお東洞門366の山本周堅のごとき、讃岐国丸亀の出身者が(呉本東洞門296によれば備前岡山侯に仕官したために)備前に配当されている例があり、ほかにも配当の是非が微妙な者もあるが、これらは考慮対象外とした⁶。

上記の混入・重出・配当不備を考慮すると、奥田本の収録人数と出身地別人数に関する矢数の報告は次のように訂正される。

東洞門五八二↓五三二人(このうち呉本未収者は40と私補と記された150・167・454・489・557の計六人。呉本にあつて奥田本未収者は一七人⁷)。しかしながら後述のごとく著者は「私補」門人を正式な入門者とは考えていないので、それを差し引けば五二七人(うちわけは京都16、山城7、大和9、河内6、和泉6、摂津27、伊勢6、尾張7、三河11、遠江6、駿河5、伊豆1、

相模 1、武蔵 42 ↓ 28、上総 2、下総 2、常陸 5 ↓ 4、近江 8 ↓ 7、美濃 6、信濃 4、上野 4、下野 3、陸奥 52 ↓ 35、出羽 15、若狭 3 ↓ 0、越前 5、加賀 1、能登 1、越中 7、越後 3 ↓ 2、丹州 7、但馬 6、因幡 2、伯耆 6、出雲 9、石見 14、播磨 38、美作 10、備前 10、備中 15、備後 15、安芸 19、周防 22、長門 10 ↓ 9、紀伊 13、淡路 2、阿波 20 ↓ 19、讃岐 11、伊予 22、土佐 6、筑前 8、筑後 2、豊後 10、肥前 5、肥後 13 ↓ 12、日向 15 ↓ 0、薩摩 1)。

南涯門三一九 ↓ 三五四人 (このうち呉本未収者は 4・37・52・73・380 の五人。うちわけは、三河 11 ↓ 18、遠江 42 ↓ 35、駿河 16、甲斐 12、伊豆 1、相模 2、武蔵 32、安房 1、上総 2、下総 2、常陸 7、信濃 16、上野 10 ↓ 9、下野 3、越後 17、陸奥 50 ↓ 68、出羽 33、尾張 25、伊勢 37、日向 0 ↓ 15、若狭 0 ↓ 3)。

北洲門一一三 ↓ 一六六人 (うちわけは三河 6 ↓ 5、遠江 12、駿河 4、甲斐 5、相模 3、武蔵 8 ↓ 22、常陸 9、信濃 5、越後 12、佐渡 1、陸奥 24 ↓ 23、出羽 10、尾張 10、伊勢 4、下野 0 ↓ 1)。

③ 「成立過程」奥田本と呉本の対照作業を行つてゆくと、すぐに奥田本の人名記載順序に一定の特徴があることに気付く。例えば東洞門巻頭の京都出身者一六人に呉本の番号を配当してみると、順に 23 26 29 57 72 92 165 215 268 369 387 459 498 533 539 540 となつて、各国ごとの門人の記載順が (ごく一部の錯雑によるとみられる例外を除いては)、呉本の記載順 (すなわち入門年時順) に従つてゐることに気付く。この現象は南涯・北洲門にも共通するものである。

奥田本はその奥書きから、吉益家架蔵本から天保十四年(一八四三)七月に奥田鳳作が転写した本であることが知られている。しかしながらこの地域別門人録は門人録の原初型とは考えられない。吉益家には入門順に記した原「門人録」(すなわち「通刺記」)があつたわけだから、奥田本の祖本はその原「門人録」を順に繰りながら各国別に配当して編集したものであると考えられるのである。

翻つて、両本の同一人に就て呉本の番号を奥田本に配当した時、呉本の順番と奥田本の各国ごとの記載順とに食い違いが生じないことは、呉本が原「門人録」の記載順序に忠実であることをも証している。

ともあれ奥田本は原門人録からの再編集資料と位置づけ得る⁹⁾。かつ再編時に入門年月日・字号・紹介者名・没年月日等の情報を省略してしまっているために、史料価値の点から見て、原門人録に忠実な奥本に遥かに劣る。奥田本の意義は、国別の入門者の前後関係を知るに便利な点と、奥本の番号を奥田本に配当する時、その番号の大小が入門年時の前後を示すことから、国単位での吉益流医学の伝播状況の遅速に関して、ある程度の目安となり得る点に見出すことができる。

④「私補門人について」奥田本東洞門人録には先述のように「私補」の字を冠した門人が五人（159北條玄益、167中神琴溪、454瀧鶴台、489新崎国林、557村井椿寿）存在し、いずれも奥本未収者である。しかるに奥田本の「475伊沢則素 字子雄 徳島人」という記述からは解らないが、奥本の伊沢則素の項を参照すると次のように記されている。

伊沢則素 字子雅・一字安南 阿州徳島人 後改氏永田 一字原道 又改新崎丈菴 更名国林

つまり伊沢則素が新崎国林の前名であることが知られるのである。奥田本の475と489も実は重出であるわけだが、奥田本の記載だけではこのことが判らないのである。

「私補」は誰の手によるものであろうか。伊沢則素と新崎国林の重出は、如上の明確な記載が伊沢則素にある以上、奥本の祖本たる原門人録ではあり得ないことだ。原門人録を参照しながら吉益家において編纂された、奥田本の祖本の段階でもまずないと言える。とすれば「私補」は奥田鳳作の天保十四年時（東洞没年から七〇年後）の私見による増補と考えるべきである。しかもこの増補は原門人録に忠実な奥本に未収である以上、甚だ根拠薄弱なものと言わねばならない。よって伊沢則素の名で奥本に見えている新崎国林以外の「私補」門人四人、北條玄益・中神琴溪・瀧鶴台・村井琴山は東洞に正式な入門手続きをとった者ではないと判断する。中神琴溪は従来¹⁰⁾の所伝のごとく、六角重任「古方便覧」を読み発憤して、独力で古方を修得したとすることが妥当であると考えるものである。

二、深川本

①「概要」矢数の報告によれば³⁾、柱刻「著名医家門類篇 木村濟生塾保存」と氏名・入門年月日・出身地・紹介者・

事蹟等の記入欄が印刷された特製の用箋に、深川晨堂が墨書したもので、深川より委託された平野啓司から矢数に委譲された。深川が「木村濟生塾（※木村博昭家塾）の命を受けて整理・筆写した⁽³⁾」ものとされる。吉益家三代（南涯・北洲・復軒）と元矢の倉多紀家二代（笹庭・雲從⁽¹⁾）の門人録からなる。

収録人数は、南涯門八七六人、北洲門六七〇人、復軒門三五八人、計一九〇四人。東洞門と文化四年以降（文化九年まで）の南涯門を欠く点に憾みがある。

②「史料価値」南涯門の文化四年以前、北洲門、復軒門について見る時、深川本は呉本に記載の順次・内容・用字の点でかなり近似していることから、両本は同一の祖本（原門人録）系統に属する写本であると考え得る。特に活字翻刻を見ている限りでは、深川本は氏名・入門年月日・住所を完備し、入門順に記されている点で、通常の門人録の体裁に合致しているように見える。しかしながら深川本が前記のごとき用箋に記入される過程を経ていることを忘れてはならない。活字翻刻の際に氏名・入門年月日・入門当時の住所の項目を立てて深川本の記事を再編したことにより、原本よりもかえって通常の門人録の体裁に近づく結果となったのである。用箋記入時に紹介者名はそのほとんどが省略され、藩医の記載もまま削られている。かつ記入欄が定まった用箋は半葉毎の独立性が高いため、原門人録に「同前」と記している場合や、入門年月日が空欄の場合などに、記入欄を埋めるための同定の必要が生じ、この過程で（主として北洲・復軒門における入門月日に関して）多数の不正確なデータを持ち込むことになった。収録人数のみならず、一人あたりの情報量の多寡と内容の正確さという史料性の点からも深川本は呉本に及ばないと言える。

③「錯簡」深川本南涯門の43宮崎右門と44今城養賢は呉本の順序では前者が54、後者が63。呉本では宮崎右門の次は橋本了迪で、橋本は深川本では55番である。つまり深川本の44今城養賢から45長原元栄までの二一人は、52飯島文景以下にあるべきで、ここに大きな錯簡がある（かつ深川本67瀧川仁庵（呉54）・68石橋雅祐（呉55）も50高橋春斎（呉53）と51黒田寿伯（呉56）の間に入るべきもの）。

この錯簡の結果が矢数報告のグラフ「吉益南涯門の各年毎入門者数」の寛政十二年と享和元年に不自然な振幅となつて表われている。深川本では入門者数が寛政八年三三人、九年三〇人、十年四七人、十一年三〇人と推移してきたものが、十二年に一二人に激減、享和元年に九四人に激増。以後、二年五二人、三年七一人、文化元年六五人、二年七三人。だが右の錯簡を正して、433宮崎右門(寛政十二年二月)と434今城養賢(寛政十二年二月十一日とあるが、呉本に従えば十月十一日)の間に、455橋本号迪(寛政十三年ではなく寛政十二年二月)から502飯島文景(寛政十三年ではなく寛政十二年十月五日)まで四八人を挿入すれば、正しい入門者数は、寛政十二年六〇人、享和元年四六人となり、遥かに妥当な結果を得るのである。

未翻刻の北洲・復軒門では、復軒門に錯簡がある。深川本復軒門は29牧村左仲司の次に下笠弥三(呉34 元治元年正月十日、深川本では弘化元年)から小池少齐(呉37 慶応元年正月十八日、深川本では弘化元年正月十八日)まで一四人が続く。この一四人は呉本に照らせば、深川本34菅谷乾革と35税所謙齋の間に入るべきもの。この錯簡を正せば入門者数は弘化元年三二人↓七人、二年〇人↓九人、三年七人↓九人、元治元年〇人↓九人、慶応元年〇人↓四人、二年三人↓四人と修正され、穏当な結果を得るのである。

三、呉本

①「書誌事項」

〈体裁〉半紙本二冊、第一冊九九丁、第二冊一一一丁、每半丁一〇行、近代写本(墨書)。

〈外題〉「吉益家門人録 一(二)」と表紙中央に墨書する。本文とは別筆。

〈内題〉「通刺記」第一冊首第一行。

〈内封題〉「通刺 東洞先生 宝暦元年ヨリ安永二年七至ル」第一冊首、「通刺 南涯先生 安永三年ヨリ文化十年ニ至ル」第二冊三六丁の次、以上は「外題」と同筆か。「通刺 従文化四年至文化九年」第二冊首(すなわち南涯門人録の後半)

で深川本欠落部分、「通刺 従文化十年至文政十二年」第二冊一八丁の次（すなわち北洲門人録）、「通刺 従文政十三年至明治初年」第二冊五六丁の次（すなわち復軒門人録）。

△序跋▽第一冊巻首に宝暦元年（一七五二）冬の鶴田元逸撰文の漢文体の序一丁がある。

△書入れ等▽全冊随所に呉秀三筆蹟と見られる鉛筆の書入あり。第一冊表紙裏に「東洞 宝暦元至安永二年／南涯 安永三至明治四年／鶴田元逸序編」。第一冊三丁より三六丁にいたる各丁表末行の書眉に25……546のごとき算用数字あり。呉氏が門人数を数えた時の所記と見られる。第一冊末丁に103、第二冊一八丁裏に141、第二冊七七丁裏「従是以下復軒門人」の前に57とある。

また東洞門中の著名人と見られる一三人、すなわち鶴田沖、中西惟忠・中村貞治・田中栄信・有木良輔・小野寿軒・山辺監司・村井藤伍・岑右膳・瀬丘長圭・和田泰純・吉村扁宜・桃井安貞の書眉に朱圈が、南涯門中の著名人と見られる三人、すなわち賀屋恭安・氏家春安・長与俊達の書眉に黒圈が付されている。

南涯門の寛政四年から享和二年にかけて、一部用箋を切継いで補訂した箇所がある（この理由については後に考察する）。

②「概要」以上の書誌事項から該門人録は、東洞門の鶴田元逸によって宝暦元年（一七五二）冬に編集されたのを発端とし、以後逐次、明治四年（一八七二）まで四代、約一二〇年にわたって書き継がれたものであると知られる。書題は当初、鶴田元逸によって東洞門人録が「通刺記」と命名され、それが後代まで継承され、「通刺記」または「通刺」と称された。外題「吉益家門人録」は、呉本浄写時の、恐らくは呉秀三による命名か。

③「収録人数の確定」右記の書入れの箇所て傍点を付した算用数字が、呉の『東洞全集』（二二八頁、吐鳳堂・一九一八年刊、思文閣出版・一九七〇年復刻）の次の報告と一致する。

凡ソ東洞先生ノ門下ニアリシモノ通刺記（門人帳）ニ記載セルハ宝暦元年（一七五二）ヨリ安永二年（一七七三）マデ二百四十六人ナリ。……南涯ノ門下ニアリシモノ安永三年（一七七四）ヨリ文化十年（一八一三）マデ千四百十二

人。北洲ノ門下ニアリシモノ文化十一年(二八一四)ヨリ天保十四年(二八四三)マデニ六百七十五人ナリ。

呉が『東洞全集』に復軒門人の数を省いたのは、明治二十六年(一八九三)まで生存した同人の門人総数を、明治初年を下限とする該門人録所収が捕捉し得ていないと考えたためであろう。

しかしながら呉の記述した門人数は正確さを欠く。東洞門人数は所見では呉所記の五四六よりも一名少ない五四五人である。誤差の原因は呉が、宝暦十三年入門者の次の記載を一名のことと見ず二名のことと判断したことに基づく。

富田 養伝 備州岡山之人

姓紀名正休 松平予州侯之家中

これを呉は「富田養伝」と「紀正休」と考えたものと推定する。確かに誤解を生じ易い記載である。しかしながら奥田本を参看すると「365 富田 養伝 名正休 岡山人」とあって、字句の異同はあるものの、富田養伝が本姓紀氏で名を正休(体)と言ったことがわかり、上記の二行が富田養伝一名の記事であったことが知られるのである。

次に南涯門人数は所見では呉所記の一四一二よりも四名少ない一四〇八人である。誤差の原因は単純な数え誤りによる。呉は東洞門では全門人に番号を付したが、南涯門になるとその作業にやや倦んだためか、一〇〇人毎に数字を付した。最初に呉が100と記したのは天明二年入門の黒川帯刀であるが、所見では黒川は九七番であって、ここにまず三名分の誤差が生じた。この誤差のまま推移して第一冊の末で一〇七三人(所見では一〇七〇人)に至り、第二冊に入り林玄碩に100を付したが所見では林は一〇九六番であって、さらに一名の誤差が生じ、合わせて四名分の過剰となったものである。

北洲門人数に関しても呉は同様の数え誤りを一回犯しているため、所見では呉所記の六七五より一名少ない六七四人である。

では呉本は東洞門五四五人、南涯門一四〇八人、北洲間六七四人と断定してよいか。問題は重出者の存在と、吉益家

代替りの時期に見られる先代門人の次代門人録の中への混入である。重出者は、東洞門では八木退蔵(424・531、以下著者が翻刻時に付した番号を以て人名に代え、いちいち断らない)と486・532。

南涯門では223・225、165・226、193・241、237・242、235・243、222・244、201・247、230・248、229・249、159・257、207・265、271・274、287・292、336・342、344・355、338・356、313・363、357・364、94・371、376・405、406・410、431・437、401・444、459・463、500・501、491・502、499・503、510・512、559・572、585・597、580・599、623・627、620・632、631・636、635・643、639・644、1224・1310、208・1338、36・1361、の以上三九人が重出者である。末尾二人のごとき、両記載年時の間の距りの大きい者は、再度の入門の可能性も考えられ、重出にも相応の意義が認められるが、他の場合は原本の未整理による重出と考えられるから、延べ人数を以て門人数とすることは躊躇されるのである。

北洲門では120・132の重出のほか、南涯門人(135)で後に北洲にも入門した難波立愿(415)をも重出者と見做した。復軒門にはなし。

次に世代交替期における先代門人の混入については、東洞は勿論なく、南涯にもなし。北洲門では「先人中」の記載が1、2、3、4、5、6、40、63、96、103、104、123、160、202、227、233、484の一七人に見えるが、北洲門筆頭の1は文化十年七月(南涯、六月十三日没)であることから、南涯門人には数えない。復軒門では13、15、17、24の四人に「北洲門人」と明記されているので、北洲門人に数える。

以上の二点を考慮した結果、改めて各代の門人数を求めると次のようになる。東洞門五四三人、南涯門一三六九人、北洲門六七六人、復軒門三五九人、総計二九五七人。

④「原本の所在と伝写の経緯」呉の医史学研究的軌跡は次のように概括できる。明治二〇年代の約一〇年間弱、富士川游と共に研究に邁進。三〇年代に入ると専攻の精神病学研究や欧州留学のために研究を中断。富士川の大著『日本医学史』(明治三七年刊)完成を機に研究意欲が再燃し、晩年まで衰えを見せなかった、と。明治二十年代には呉の「吉益東

洞先生」(『芸備医事』一号、一八九六年六月)があるが、主要門人一〇人を列挙するのみで、『通刺記』参照の跡なし。明治三〇年代には富士川の『日本医学史』(一九〇四)が、岑少翁の字を班如(『通刺記』は班如)に作り、入門年も特に記さず(『通刺記』によれば明和五年入門)、この時点での『通刺記』未見を推測させる。『通刺記』への言及は、富士川の『芸備医人伝 第一輯』(一九一六刊)が管見の限り初見。よって『通刺記』が富士川・呉の視野に入った時期は明治三七年以降大正五年以前(一九〇四〜一六)と考えるものである。

次に門人録原本は、その家に代々襲蔵されるのが普通である。すなわち東洞―南涯―北洲―復軒―四峯―雄太郎―為則―篤と続く吉益本家である。吉益本家と富士川・呉は交流があつたから、吉益家に『通刺記』が所蔵されていれば当然伝写の機会はあつたはずである。吉益家との交渉は、明治二五年(一八九二)富士川が最晩年の復軒(一八二〇―一九三)を京都四条高倉に訪ねた頃に始まる。この時富士川は肖像面模写や伝記調査依頼に成功し(『中外医事新報』二九八号)、それに応えて復軒から寄せられた情報が富士川・呉共編『医史料 第三号』(一八九五)に「吉益東洞、南涯両先生門人録及著述目録」として掲載された。復軒所伝のこの情報は富士川・呉に信据され、『東洞全集』にもよく踏襲されたが、『全集』所載の主要東洞門人三〇人中、二二人が『医史料』所載を踏襲、一方でこれら主要門人すら『通刺記』に漏れている者があると指摘している(『全集』一二八頁)。「医史料」の記述から見て、復軒の情報源は門人録ではなく、主として東洞著作の編・校・序・跋者からの抽出であることが明らかである(例えば「神原行」を「かんげんぎょう 医断」序から抽出したために「原子蔵」と修姓と字で記す例は、復軒が門人録を参看していないことを示唆している)。「東洞全集」の論旨はどちらかと言えば「通刺記」の不備を衝く方に傾きがちだが、著者はむしろ復軒所伝をこそ再検討すべきであると考え、前記・奥田本「私補門人」の例に等しい。むしろ復軒が門人録を繰る煩を厭うた可能性はあり得るから、これを以て『通刺記』原本が吉益本家に明治二五年当時なかったと断定することはできないが、一傍証とはなり得よう。「東洞全集」凡例でも吉益雄太郎をはじめ十数名の史料提供者と提供史料についての記載があるが、門人録のことは見えない。以上のことから、『通刺

表 1 諸本の収録状況

諸本 塾主	呉	奥田	深川	合計 <%>
東 洞	543	527(1)		544<18.4>
南 涯	1034	354(5)	876(1)	1375<46.5>
南 涯 (文化 4~9)	335	※東日本のみ		
北 洲	676	126 ※東日本のみ	670(1)	677<22.9>
復 軒	359		358(2)	361<12.2>
合 計	2947	1007(6)	1904(4)	2957<100>

※ () 内の数字は呉本未収者数を示す。

記』原本については、早く(明治二五年頃すでに)吉益本家から流出していた可能性を指摘する以外、現在の所在、呉(或は富士川)の入手経路ともに未詳。

四、小 結

以上、奥田・深川・呉本の考察結果をふまえて、三本が収める時期と人数を表示して整理しておく(表1)。

III 鶴田元逸序

鶴田元逸が『通刺記』に書いた序文のことは『東洞全集』一一九頁に見えるが、序文自体は未紹介であるから、ここに釈読を試みる。

①『鶴田元逸の略伝』生没年未詳。『医断』東洞序(宝暦二年春)に在塾七年とあることから判断すれば延享二・三年に東洞に入門。同書の中西深齋跋に、本書成稿後、郷里佐賀に帰って間もなく没したというから、宝暦二年春から余り距らず早世。鶴田家は代々佐賀藩家老多久氏の侍医を勤めた。名は沖、字は元逸。ほかに九臯と号した(『林塾明月篇』)。東洞に従学する旁ら徂徠学派の儒者林東溟(長州出身、山県南門人、山脇東洋とも親交があった)に詩文を学んだ。東洞の医論を漢文体で著述し『医断』『医断補義』等を編纂した。

②『通刺記序・原文』

古者士大夫相見、必執贄^②以往。大者玉帛^③、少者禽^③鳥。又有束脩^④、蓋其小者爾。至于漢時、用刺^⑤通謁。以竹作之、長尺、書爵里姓名於其上。或稱之謁^⑧。郭泰之車常盈、禰衡之字屢滅、可以知已。漢時無紙、故用竹耳。今也用紙亦可。由是觀之、贄刺當並用者也。通刺記者、東洞先生家塾之記也。先生姓吉益氏、名為則、字公言、藝之広陵人也。其先吉益者、從遣唐使、如唐學医。其後百余世、箕裘相繼。嘗失其姓、以吉益為氏^⑮。中世事足利、冒姓為畠山氏、列在戚族。或在於紀、或在於藝^⑰。先生蓋自藝來于淡、唱古方、十數年于茲。遂設塾東洞。門人因私号稱東洞先生。於是四方從遊之士、接踵而至、日多。一日遂使小子冲等、記其姓名云。

宝曆改元之冬 門人 西肥 崔冲撰

③「注釈」①士大夫—官吏、②執贄—初めて面会を求める時に相手に敬意を表して品物(贄)を携行(執)して贈ること。贄はまた摯にも作る。③玉帛禽鳥—中国古代、天子謁見の時に、諸侯は玉、世子は帛、卿は小羊、大夫は雁、士は矩を贄とする規定があった(『周礼』春官・大宗伯)。④束脩—原義は十本の乾肉。入学時に師に贈る贄のうちで薄少なものの(『論語』述而・刑昺疏)。⑤刺—姓名を記した札。⑥尺—荻生徂徠は周漢尺の一寸を當時の七寸二分弱(七寸一分九釐六毫三糸有奇、約二・一八六厘、「度量衡考」『周尺考』)としている。⑦爵里—官爵と郷里。⑧謁—名刺(『史記』高祖紀「高祖乃給為謁」司馬貞索隱「謁、謂以札書姓名、若今之通刺」)。⑨郭泰之車常盈—後漢・郭泰(太とも)が陳・梁の人に慕われ、從学を求める士人の刺札が車にいっぱいになった故事をいう(「士争往從之、載策盈車」、『漢魏叢書』所収・皇甫謐「高士伝」下)。⑩禰衡之字屢滅—後漢・禰衡^{ダイカウ}が仕官を求めて歴遊したため、懐の刺札の文字が消えてしまった故事をいう(「乃陰懷一刺、既而無所之適、至於刺字漫滅」、『後漢書』文苑伝・下)。⑪漢時無紙—後漢・蔡倫が元興元年(二〇五)に紙を作って奏上したのが嚆矢とされている(『後漢書』蔡倫伝)。⑫広陵—広島。⑬吉益—遠祖の名?伝未詳。この家伝は南涯撰「東洞先生行状」等の所伝と異なる点多し。⑭箕裘—良工の子が家業を見習い覚えるの意から転じて、父祖の業をいう。⑮吉益氏—「行状」では曾祖父政慶が戦禍を逃れて河内の金瘡医吉益半咲斎に寄寓し、吉益姓を称したという。⑯冒姓—原

本「昌」に作る。「昌^{はじ}めて姓して」の可能もあるが、他姓を称する意の「冒姓」の語はより普通であり文脈上も矛盾しないので、原文を改める。「行状」は、管領畠山政長の後裔で、高祖父高政―曾祖父政慶―祖父政光（道庵）―父重宗と続いたと伝える。⑰或在于紀或在于藝―「行状」には、浅野氏の紀伊入封（慶長6）、安芸転封（元和5）に従つて移動したとある。⑱来于淡―普通「淡」は淡州、淡路国をさすが、ここでは淡海（近江）の意とも考えられる。淡路・近江での足跡は未詳。⑲設塾東洞―原本「在洞」に作るが、草体の近似による転写時の誤まりとみて、原文を改める。東洞院通竹屋町下ルへの転居は延享四年（一七四七）のこと（「行状」）。

④ 「訓読」

古者^{いにしえ} 士大夫相見^{まみ}えるに、必ず贄^{にえ}を執りて以て往く。大なる者は玉帛、少なる者は禽鳥。又た束脩有り、蓋^{けだ}し其の小なる者のみ。漢の時に至りて刺を用ひて謁を通ず。竹を以て之を作り、長さは尺、爵里姓名を其の上に書す。或は之を謁と称す。「郭泰の車、常に盈つ」「禰衡の字屢々滅す」と、以て知るべきのみ。漢の時、紙無し、故に竹を用ふるのみ。今や紙を用ふるも亦た可なり。是れに由つて之を觀れば、贄・刺は当^{まさ}に並用すべきものなり。

通刺記は東洞先生家塾の記なり。先生、姓は吉益氏、名は為則、字は公言、藝の広陵の人なり。其の先、吉益なる者、遣唐使に従ひ、唐に如^かき医を学ぶ。其の後百余世、箕裘相継ぐ。嘗て其の姓を失ひ、吉益を以て氏と為す。中世、足利に事^{つか}へ、姓を冒して畠山氏と為り、列して戚族に在り。或は紀に在り、或は藝に在り。先生蓋し藝より淡に來り、古方を唱へて、茲^{ここ}に十数年。遂^{つひ}に塾を東洞に設く。門人、因りて私号して東洞先生と称す。是に於いて四方從遊^{くびす}の士、踵^{くびす}に接して至り、日に多し。一日遂に小子冲等^{いもしつ}をして其の姓名を記せしむと云ふ。

宝曆改元の冬 門人 西肥 窪冲撰す。

⑤ 「口語訳」

古代、士大夫が面会する時には必ず贄を携えて行ったものだ。多いものでは玉や帛、少ないものでは禽鳥が用いられ

た。他に(入門時の)束脩があるが、これは思うに最低限の費である。漢代に入ると刺で面会を通達した。刺は竹で作った長さ一尺ほどの札で、その上に官爵・郷里・姓名を書き、謁とも言った。「郭泰の車はいつも刺札で一杯だった」「禰衡の刺札の文字が何度も消えた」という故事によって、刺札のことがわかる。漢代は紙がなかったので竹を用いたのだ。今は紙を使用してもよからう。以上のことから、贅と刺は通用することができるといえる。

「通刺記」は、東洞先生の家塾の記録である。先生は姓は吉益氏、名は為則、字は公言、安芸国広島の人である。先祖の吉益なる人物が遣唐使といっしょに唐に渡り、医学を学んで以来、百余代にわたって医業を継承してきた。姓がわからなくなったので、吉益氏を称するようになった。中世は足利氏に仕えて畠山氏を名乗り、將軍家の親族に加えられていた。紀伊国や安芸国に住んでいた。先生は安芸から淡州(又は近江)に来て古方を始めてより十数年、塾を東洞院に設立するにいたった。門人たちは、地名に因んで自分たちで東洞先生と呼んだ。そこで各地から従学する者が次々にやって来て、日に日に多くなったので、ある日、わたくし冲らに門人の姓名を記録させることになったのである。

IV 吉益塾の消長

一、東洞門の初期入門者について

既述の通り「通刺記」の編纂は宝暦元年冬に開始されたが、これは「通刺記」登録者が宝暦元年冬以降の入門者であることを示すものではない。鶴田元逸の序文に言うごとく、東洞が延享四年(一七四七)に東洞院竹屋町下ルに移居して家塾を開いて以来、従学者が日に日に増加したため、東洞院開塾より四年を経た宝暦元年(一七五一)冬の時点で「通刺記」として編集する運びとなったわけである。従って「通刺記」冒頭は宝暦元年冬以前の入門者名と見ることができ、一般に門人録の記載順は入門時順を示すものと判断してよいが、宝暦元年冬に一挙に列記された冒頭部分に関しては、記載順が入門順を正確に反映しているとは言い切れない。しかし他に判断材料がない以上、最初期の東洞門人を知る上

で、この記載順は尊重すべきである。

年時の明記は宝暦十二年（二七六二）からである。それ以前の二二〇人の入門時期に関して、目安となる資料をここに提出しておく。17番の鶴田元逸の入門年は先述のごとく延享二・三年（一七四五・六）年である。84番の長田温は宝暦三年（一七五三）十月に医業を修めて離塾している（『東洞先生遺稿』巻中「送長君玉還備中足守序」）。平均的な在塾期間を三年程度と推算してよいならば、長田の入門は寛延三年（二七五〇）〜宝暦元年（一七五一）と見られる。

時に記される死亡年時の記載も、その門人の入門時期の下限を示す目安となる。例えば30林玄睦―延享五年（一七四八）四月三日卒、53安藤重一―寛延二年（二七四九）冬卒、95高橋定軒―宝暦五年（一七五五）三月七日卒、104須山彦美―宝暦八年（一七五八）卒などである。

以上のことから、鶴田元逸あたりまでの最初期門人は東洞院開塾以前の万里小路春日通南（現柳馬場丸太町南）時代の入門者であることが確認できる。後に触れるが、この最初期門人に京撰などの近郊出身者が少なく東北などの遠隔地からの入門者が多いことは注目されることである。

二、南涯時代の大坂移住をめぐって

①「呉本の切り継ぎの意味」南涯門人数における深川本八七六人と呉本一三六九（呉秀三報告では一四二二）人の差四九三（五三二）人を、矢数は深川本が欠く文化四年から十年まで七年間の入門者数に比定している²。しかしながら表1に既述の通り、文化三年までの入門者数は一〇三四人、文化四年から九年までは三三五人であって、深川本欠落部分を両本の人数差とする推定が必ずしも正しくないことを示している。文化三年以前ですでに深川本は呉本よりも一五八人少ないのである。この差異の原因はどこにあるのであろうか。深川本未収者は呉本翻刻時に番号と人名の間に×印を付しておいたから、詳細は翻刻を参照されたいが、×印は寛政四年から享和二年にかけて集中的にあらわれる。一層注意してみると、享和元年（寛政十三年）と享和二年の箇所には、一旦60から70にかけて寛政十三年正月から霜月までの入門者を

記したのち、再び706から714にかけて同じ年、享和元年二月三日から十月二十日までの入門者を記し、次に715から767にかけて享和二年正月から霜月までの入門者を記したのち、768から770まで同じ年の二月七日から五月八日までの入門者を記し、一見原本に錯雑があったかの体裁を示す。これほど明らかな混乱でないまでも、寛政四年から十二年にかけての記録にも、例えば次のような釈然としない箇所が散見する。

281 永野伊作 芸州

三月

282 × 島本中道 土州之産

森尾白齋紹介 三月廿四日

283 × 長谷川彦之丞 京師之産

父三平紹介 三月廿五日

284 × 森 文獻 芸州之産

安藤周蔵紹介 四月十三日

285 船越令介 志州鳥羽

四月

全巻を通覧すると、門人録の書式には各代にある程度のパターンがあつて、南涯門においては紹介者名と入門の日付まで記す282×284の例は少なく、かつこの時期に限って見られる。四月十三日入門者の次に四月入門者が記されるのも不可解である。

著者は当初翻刻にあたってこの箇所を単なる錯雑とみて、日付順に整理し直すべきかと迷つたが、結局、原本の体裁のまま翻刻することにした。それはこの錯雑が二種類の門人録からの編集過程を示すものと判断するに到つたからである。判断の根拠は二つ。一つは、原資料を見ないとわからないことだが、先に「書誌事項」に既述した切り継ぎ箇所が×印を付した深川本未収者とほぼ完全に一致すること。二つめは、呉本109以下の「大坂入門」と呉本北洲門88以下の「浪華社中」の記載である。

ここで南涯の伝記を繙けば、天明二年より住んだ京都・新町通御池南の家を天明八年正月の大火で焼失し、弟巖齋らと共に大坂船場伏見町に移つたが、翌寛政元年十月、京都三条通東洞院西北角の土地を購入して新築し、同四年に帰洛

して開業した（一説に帰洛は寛政三年とも）⁽¹³⁾。大坂伏見町の住居は羸齋に譲られたとされる。⁽¹⁴⁾

この伝記的事実と呉本の切り継ぎとが、ほぼ矛盾しないようなのである。寛政三年までは、京都から大坂への移転はあっても吉益塾自体は一つであるから、門人録も京都時代のものが焼失していない限り書き継いでゆくことができる。寛政四年以降、南涯帰洛と羸齋残留によって京坂両塾併存の事態となつたうえは、大坂塾用の門人録の必要が生じたのである。紹介者名と入門日付を備えた方が大坂塾門人録に由来し、それ以外が京都本塾のものと著者は解する。かく解すれば深川本が呉本の文化三年以前入門者数に比して一五八人少ない理由も、深川本が京都本塾の門人録（の文化三年まで）を収めるのに対して、呉本が京都本塾入門者のあいだに大坂塾入門者をほぼ入門年時順に切り継ぎ、編纂したことに由来すると、合理的な説明が可能である。

②「羸齋と吉益大坂塾との関係について」しかしながら、上記のように解する時、新たな疑問が生じる。呉本²⁵⁹・³⁶³・⁶¹²はいずれも紹介者名と日付を備えた大坂塾入門者と考えるべきものだが、その紹介者は「掃部」すなわち羸齋である。しかもこの「掃部紹介」の記され方は、上記三名の前後の大坂塾入門者の紹介者名と全く同列であつて、大坂塾入門者を羸齋が仲介して京都本塾に取り次いだといった意味に解し得るものではない。羸齋が大坂塾への入門紹介者として見えている以上、伏見町の吉益塾は羸齋と別個のものでなければならず、南涯帰洛後は羸齋が大坂塾を主宰したとする従来の見解は修正を要するのである。

実は既に呉秀三が羸齋の開業住所を道修堀裏元伝馬町（とどろ）と明記している（『東洞全集』一〇五頁）。この記述に根拠があることは、寛政末から文化にかけての三種類の大坂医師番付に吉益掃部の住所が「元（本）天満（マ）」と記されることが証している⁽¹⁵⁾。大坂吉益家は羸齋没後（二八一六）、養嗣子樗齋（？）一八五四）―嗣子恬齋（一八〇二）一八四六）―嗣子梅癡（一八四二）一八六一）と継承され、掃部を襲称した。よつて吉益掃部（加門）の名は幕末に至るまで番付に見えるが、前記三種以外のものはすべて住所を「伏見町」と記している。

以上のことから、羸齋が南涯帰洛後も伏見町の南涯僑居とは別に本天満町で開業していたこと、伏見町居宅は南涯の大坂支塾として維持されたこと、それが後に羸齋に委譲されたことがわかる。呉本の切り継ぎ状態から見て、少なくとも寛政四年から享和二年までは伏見町僑居は南涯塾として機能したといえる。以後は、文化三年に七人の「大坂入門」者、文化十四年に二人の「浪華社中」¹⁶⁾が見えるに止まり、大坂の羸齋主宰の塾の南涯からの独立を示すごとくである。

三、吉益流の伝播状況

①「入門者数の推移」既に矢数によって文化三年以前の南涯門の各年入門者数はグラフ化されている。³⁾ 呉本の出現によりその前後、東洞・北洲・復軒を書き加えることが可能になった。ここに吉益塾一二〇年余の消長の軌跡を瞭然たらしめておきたい。

グラフ化に際し次の処理を施した。開始年は延享二年(一七四五)とする。延享二年より宝暦十一年(一七六一)までは年記を欠くので、一七一年間に二二〇人入門の平均値(約二三〇)をとって表した。北洲門に文化十一年(二八一四)の記載がなく文化十年は四〇人と突出するので、この四〇人を文化十一年の入門者とみて平均値をとり兩年二〇人ずつとした。北洲門に天保九・十・十一・十二年の記載がなく、天保八年は六一人と突出するので(脱欠の可能性も否定し切れないが)、平均値をとって五年間毎年約二二人ずつとした。以上三つの時期は区別するために点線で示した。南涯門の寛政四年(一七九二)から享和二年(二八〇二)までの京都大坂両塾併存期は、両塾入門者の合計だけでなく、大坂塾入門者を併記した。東洞末年における南涯門人の併存、復軒初年における北洲門人の混在は、両者の合計を示すだけでなく、南涯門人数・北洲門人数も併記した。呉本未収者で深川本にのみ載せる者も対象とした。¹⁹⁾ 奥田本にのみ載せる者は年記を欠くので対象から除外した。よって考察対象者は二九五一人である。

△結果と考察▽全体を見渡してまず明瞭に看取されることは、南涯門の一八〇年前後(寛政後半から文化年間まで)十数年間の突出である。最多は一八〇六年(文化三三)の八八人である。先に表1で各代入門者数の門人総数に占める比重を

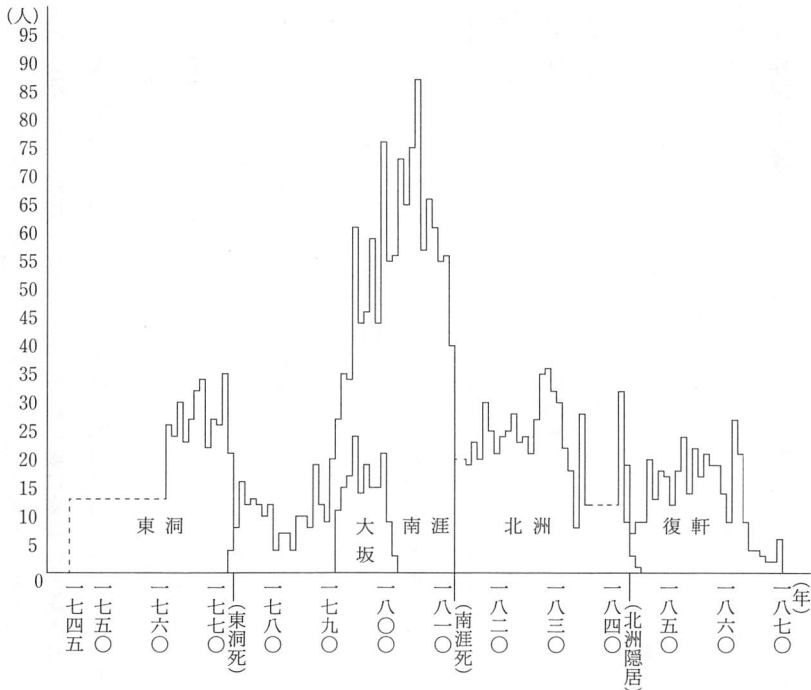


図 1 各年入門者数

示しておいたが、さらにここで右の時期の突出を数字で示せば、ピーク前後の一七九三年から一八二二年までの二〇年間（全期間の一五・八七％）の入門者数は一一四六人（全入門者の三八・七〇％）に上り、一八〇二年から一八一一年までの一〇年間（全期間の七・九四％）の入門者数は六五二人（全入門者の二二・〇二％）に上る。すなわちこの全期間の十分の一内外の時期に全入門者の四分の一（三分の一が集中した）がわかるのである。

各代の年平均入門者数は、東洞時代が一八・七二人（一七六一年を境に二期に分ければ、前期一一・九四人、後期二六・九二人）。南涯時代が三四・二五人（一七九二年以前の前期は一一・二人、一七九三年以後の後期は五七・三人）。北洲時代は二一・八四人、復軒時代は一三・三七人となる。東洞後期の興隆が、東洞の死により南涯前期の沈滞をもたらした後、南涯後期に極盛を迎え、南涯死後、北洲・復軒二代はついにその盛時に復することはなかったが、北洲時代はほぼ東洞後期の水準を維持し、復軒時

代になると東洞前期の水準にまで低下したと見る事ができる。量を質に換算することができないことは言を俟たないが、単に入門者数の推移から見ると、吉益塾は如上の軌跡を辿った。北洲・復軒時代の停滞の背景には、一九世紀以降の蘭学・洋学の盛行や、各地における藩学の建設などの原因が考えられよう。

②「入門者の地域別構成とその推移」次に吉益塾入門者の構成を考察するために、入門者の出身地別の人数を表示し、併せて各地域ごとの入門者数の時間的推移をも示しておきたい。

表化の際の凡例は次の通りである。

・考察対象は先に(表1)に示した呉本・深川本・奥田本を合わせた全門人、計二九五七人。各代ごとの門人数も(表1)の通りである。

・配当は出生地と考えられるものに従い、仕官先はとらなかつた。江戸在住の藩医も武威に配当した。

・現行の行政区分(近畿・中部・中国・四国・九州・関東・東北)下に旧国名を配当して記入した。東北地方は門人録では奥州と羽州の二区分であるのを、さらに地域を絞りこむために、便宜上、陸奥・陸中・陸前・磐城・岩代・羽後の七区分を採用した。

・地域別構成の時間的推移を見るための時期区分は、各代ごとの構成の特徴を見るべく一〇年単位といった分け方をせず、東洞前期(一七六一)、東洞後期(一七六二〜一七七三)、南涯前期(一七七三〜一七九一)、南涯中期・京坂二塾期(一七九二〜一八〇二)、南涯後期(一八〇三〜一八一二)、北洲前期(一八一三〜一八二七)、北洲後期(一八二八〜一八四三)、復軒(一八四三〜一八七〇)、以上の八期に区分した。

△結果と考察▽まず地方別の推移を概観すると、比較的安定した分布が確認できる。近畿地方28〜30%、中国地方21〜25%、四国地方10%前後、九州地方10%前後、関東地方5%前後、中部地方15%前後、東北地方10%弱。これが吉益塾入門者の出身地別構成の概観である。推移の趨勢は、近畿地方が第八期(復軒門)に35%程度までやや増加傾向にあり、中

表 2 出身地別・年代別入門者数①

年代	地方	畿													中 国												
		(畿内)													山 陰					山 陽							
		山城	大和	摂津	河内	和泉	紀伊	伊勢	近江	丹州	但馬	播磨	淡路	伊賀	志摩	石見	出雲	伯耆	因幡	隱岐	長門	周防	安芸	備後	備前	備中	備後
①	東 洞 1745~1761	11	6	15	3	2	2	3	2	4	1	13	2	0	0	8	3	3	0	0	4	11	9	6	5	0	6
	小計(%)	64 (29.09)													55 (25)												
②	東 洞 1762~1773	13	3	14	3	4	11	3	5	3	5	27	0	0	0	6	6	3	2	0	5	13	13	10	10	9	4
	小計(%)	91 (28.09)													81 (25)												
	累 積	24	9	29	6	6	13	6	7	7	6	40	2	0	0	14	9	6	2	0	9	24	22	16	15	9	10
	合計(%)	155 (28.49)													136 (25)												
③	南 涯 1773~1791	8	2	18	5	0	5	5	7	0	3	7	0	0	0	4	8	6	11	0	3	4	6	6	0	2	0
	小計(%)	60 (30.46)													50 (25.38)												
④	南 涯 1792~1802	63	0	26	2	2	23	6	10	4	7	14	0	1	1	11	9	20	6	0	3	10	10	3	5	44	8
	小計(%)	159 (29.44)													129 (23.89)												
⑤	南 涯 1803~1812	29	4	17	3	4	23	29	15	11	10	31	1	0	1	14	1	32	4	0	10	11	6	11	11	33	4
	小計(%)	178 (27.89)													137 (21.47)												
	累 積	100	6	61	10	6	51	40	32	15	20	52	1	1	2	29	18	58	21	0	16	25	22	20	16	79	12
	合計(%)	397 (28.87)													316 (22.98)												
⑥	北 洲 1813~1827	15	2	8	2	1	16	4	10	14	5	26	0	0	0	4	6	7	8	1	1	5	18	7	8	16	0
	小計(%)	103 (29.43)													81 (23.14)												
⑦	北 洲 1828~1843	21	5	5	0	2	9	3	8	6	24	11	2	0	1	3	4	22	1	5	6	2	7	1	8	12	2
	小計(%)	97 (29.66)													73 (22.32)												
	累 積	36	7	13	2	3	25	7	18	20	29	37	2	0	1	7	10	29	9	6	7	7	25	8	16	28	2
	合計(%)	200 (29.54)													154 (22.75)												
⑧	復 軒 1843~1870	40	5	13	4	1	14	1	11	22	8	4	2	2	0	9	3	6	7	2	4	3	6	4	5	8	1
	合計(%)	127 (35.18)													58 (16.07)												
	累 積	200	27	116	22	16	103	54	68	64	63	133	7	3	3	59	40	99	39	8	36	59	75	48	52	124	25
	合計(%)	879 (29.72)													664 (22.46)												

表 2 出身地別・年代別入門者数②

年代	地方				四 国									九 州									関 東						
	讃岐	阿波	伊予	土佐	豊前	豊後	筑前	筑後	肥前	肥後	日向	薩摩	武蔵	相模	上野	下野	常陸	総州	安房										
① 東 洞 1745~1761	5	11	13	0	0	6	6	2	3	1	0	0	4	0	1	0	0	0	0	0									
小計(%)	29 (13.18)				18 (8.18)									5 (2.27)															
② 東 洞 1762~1773	7	8	9	6	0	4	2	0	2	11	0	1	24	1	3	3	5	上 2 下 3	0										
小計(%)	30 (9.26)				20 (6.17)									41 (12.65)															
累 積	12	19	22	6	0	10	8	2	5	12	0	1	28	1	4	3	5	5	0										
合計(%)	59 (10.85)				38 (6.98)									46 (8.46)															
③ 南 涯 1773~1791	2	2	4	1	0	1	1	0	8	0	0	1	9	0	1	0	2	下 2	1										
小計(%)	9 (4.57)				11 (5.58)									15 (7.61)															
④ 南 涯 1792~1802	26	16	6	21	0	2	2	9	6	3	6	3	18	1	4	0	3	0	0										
小計(%)	69 (12.78)				31 (5.74)									26 (4.81)															
⑤ 南 涯 1803~1812	9	21	12	22	0	8	6	19	13	2	9	2	14	1	5	1	3	上 1 下 1	0										
小計(%)	64 (10.03)				59 (9.25)									26 (4.08)															
累 積	37	39	22	44	0	11	9	28	27	5	15	6	41	2	10	1	8	4	1										
合計(%)	142 (10.33)				101 (7.35)									67 (4.87)															
⑥ 北 洲 1813~1827	9	3	2	8	2	4	7	14	5	0	4	2	13	1	0	1	7	0	0										
小計(%)	22 (6.29)				38 (10.86)									22 (6.29)															
⑦ 北 洲 1828~1843	6	4	7	2	1	6	7	18	7	2	3	3	9	2	0	1	3	0	0										
小計(%)	19 (5.81)				47 (14.37)									15 (4.59)															
累 積	15	7	9	10	3	10	14	32	12	2	7	5	22	3	0	2	10	0	0										
合計(%)	41 (6.06)				85 (12.56)									37 (5.46)															
⑧ 復 軒 1843~1870	4	8	9	2	2	4	7	11	10	1	2	8	6	1	1	0	0	下 1 2	0										
合計(%)	23 (6.37)				45 (12.46)									11 (3.05)															
累 積	68	73	62	62	5	35	38	73	54	20	24	20	97	7	15	6	23	12	1										
合計(%)	265 (8.96)				269 (9.10)									161 (5.44)															

表 2 出身地別・年代別入門者数③

年代	地方	中 部													東 北					不明	合計						
		(東 海)			(北 陸)						(陸 奥)					(出羽)											
		伊豆	駿河	遠江	三河	尾張	越中	加賀	能登	越前	若狭	越後	佐渡	甲斐	信濃	美濃	飛騨	陸奥	陸中			陸前	磐城	岩代	不明	羽後	羽前
①	東 洞 1745~1761	0	1	2	1	1	3	1	1	3	0	0	0	0	1	3	0	4	13	4	0	1	1	4	4	1	220
	小計(%)	17 (7.73)													31 (14.09)					(0.45)	(100)						
②	東 洞 1762~1773	2	4	4	11	6	4	0	0	2	0	3	0	0	3	2	0	2	4	1	0	2	3	3	3	2	324
	小計(%)	41 (12.65)													18 (5.56)					(0.62)	(100)						
	累 積	2	5	6	12	7	7	1	1	5	0	3	0	0	4	5	0	6	17	5	0	3	4	7	7	3	544
	合計(%)	58 (10.66)													49 (9.01)					(0.55)	(100)						
③	南 涯 1773~1791	0	1	3	2	3	1	4	0	1	2	1	0	6	2	1	0	1	3	5	1	3	1	3	2	6	197
	小計(%)	27 (13.71)													19 (9.64)					(3.05)	(100)						
④	南 涯 1792~1802	1	10	23	4	8	1	5	1	8	1	6	0	3	8	3	1	7	7	4	2	2	1	10	不明 1	9	540
	小計(%)	83 (15.37)													34 (6.30)					(1.67)	(100)						
⑤	南 涯 1803~1812	0	6	13	8	14	7	14	5	5	2	12	0	3	8	8	0	3	12	16	3	4	0	7	11	13	638
	小計(%)	105 (16.46)													56 (8.78)					(2.04)	(100)						
	累 積	1	17	39	14	25	9	23	6	14	5	19	0	12	18	12	1	11	22	25	6	9	2	20	14	28	1375
	合計(%)	215 (15.63)													109 (7.93)					(2.04)	(100)						
⑥	北 洲 1813~1827	0	1	3	5	15	3	5	3	3	1	8	1	3	0	9	0	1	3	4	5	0	0	2	3	6	350
	小計(%)	60 (17.14)													18 (5.14)					(1.71)	(100)						
⑦	北 洲 1828~1843	0	4	9	7	5	4	6	3	8	0	5	0	2	5	3	0	2	2	0	2	4	0	2	3	0	327
	小計(%)	61 (18.65)													15 (4.59)					(0)	(100)						
	累 積	0	5	12	12	20	7	11	6	11	1	13	1	5	5	12	0	3	5	4	7	4	0	4	6	6	677
	合計(%)	121 (17.87)													33 (4.87)					(0.89)	(100)						
⑧	復 軒 1843~1870	3	3	5	6	2	9	10	8	4	4	7	0	0	5	5	1	4	4	5	1	2	0	0	8	1	361
	合計(%)	72 (19.94)													24 (6.65)					(0.28)	(100)						
	累 積	6	30	62	44	54	32	45	21	34	10	42	1	17	32	34	2	24	48	39	14	18	6	31	35	38	2957
	合計(%)	466 (15.76)													215 (7.27)					(1.29)	(100)						

国地方は逆に第八期に16%までやや減少傾向にある。四国地方は第一・二・四・五期(東洞・南涯門)に10%前後であったものが、第六・七・八期(北洲・復軒門)には6%内外に減少している。九州地方は逆に第一・二・三・四・五期の5%から、第六・七・八期に10%~14%に増加している。関東地方は第二期(東洞後期)の突出が目につく。中部地方は第一~八期の持続的漸増傾向にある。東北地方は第一期(東洞前期)の突出が目につく。

次に表を横に見て、各期の出身地別構成を観察し、その特徴をあげよう。第一期では、10名以上の国名は山城、摂津、播磨、周防、伊予、阿波、陸中である。特に陸中出身者の多さは地理的条件から見て特筆にたいする。第二期では山城・摂津・播磨・周防は依然として多いが、とりわけ播磨は前期比倍増。ほかに急増地域に紀伊・武蔵・三河・備前・土佐があげられる。山陽・東海地方が増加している。第三期では因幡・肥前が増加している。第四期では20名以上は山城・摂津・紀伊・備前・伯耆・讃岐・土佐・遠江で、このうち山城・備前は激増。ほかに筑後・駿河・越前・信濃・羽後が今期の新増地域と言える。第五期は備前・伯耆・土佐・紀伊・山城が依然多く、今期新増は伊勢・加賀・陸前・美濃。筑後・播磨・伯耆・伊勢が急増、その一方、畿内は激減した。第六期は播磨・安芸が多く、ついで尾張・武蔵・筑後・美濃が目立つ。新増地域は常陸。第七期は但馬・伯耆の急増が目立つ。第八期は山城・丹州が急増、薩摩が新増。北陸地方が漸増傾向にある。

次に表を縦に見て各国ごとの入門者数の時間的推移を観察しておこう。数値の推移はいわばその地域における吉益流医学の消長と読み換えることが可能であろう。各地域の医学史と重ね合わせることでこの推移を適切に意義付けることが次に必要となろうが、本稿では特徴的な動きのいくつかを指摘するにとどめる。山城の第四期(阿塾時代)の激増と摂津の第五期以降の低調、この背景には大坂吉益家の活動が考えられる。伊勢の第五期の突出には何らかの理由がある。但馬は第七期に突出が見られる。播磨は第一~七期までほぼ一貫して入門者が多かった地域。山陰では伯耆、山陽では備前が一貫して入門者が多かった。土佐は第五・六期に集中している。肥後の第二期の突出には、村井琴山の

活動が影響しているか。九州では筑前が第五期以降一貫して入門者が多かった。武蔵の第二期の突出は江戸医学館の前身・躰寿館の成り立ちと重なるだけに示唆的である。中部地方では遠江が入門者が多く、特に第四期に急増している。陸中は第一期において、陸前は第五期において突出している。

V 結 論

- 一、奥田本は呉本と対照した結果、南涯・北洲門人の東洞門への混入があることがわかった。
- 二、奥田本東洞門の五人の「私補」門人は、奥田鳳作による後補と考えられ、東洞の正式な門人とは認められない。
- 三、深川本は呉本と対照した結果、南涯門と復軒門に大きな錯簡があることがわかった。
- 四、奥田・深川両本との検討の結果、呉本は収録人数において優るだけでなく、字号・入門年月日・生地・住所・紹介者といった記事の情報量およびその正確さの点でも優る。
- 五、呉本収録人数は、重出者等を考慮すれば、呉秀三の報告、東洞門五四六・南涯門一四一二、北洲門六七五を修正し、東洞門五四三、南涯門一三六九、北洲門六七六とすべきである。
- 六、三本を勘案すると各門人数は、東洞五四四、南涯一三七五、北洲六七七、復軒三六一、合計二九五七となる。
- 七、南涯門における呉本と深川本の収録数の差は、文化四年以後を深川本が欠くことだけに起因するものではなく、寛政四年から享和二年の時期に呉本が多数の深川本未収者を載せることも一因をなしている。当該時期は南涯が罹災して大坂移住の後、再び帰京した年を起点とする数年間で、京都と大坂に南涯の塾が併存した時期と考えられ、呉本のみの所蔵者は当該時期の大坂塾入門者と推定される。

八、吉益塾入門者は南涯の文化三年（一八〇六）に最多を数え、この前後十数年間に全入門者の四分の一〜三分の一が集中した。南涯前期には東洞の死の影響とみられる沈滞が続いた。北洲期は東洞後期の水準に匹敵し、復軒期は東洞前

期の水準に落ちこんだ。

九、吉益塾入門者の出身地別構成は、近畿28～30%、中国21～25%、四国10%内外、九州10%内外、関東5%内外、中部15%内外、東北10%弱である。

謝 辞 貴重な資料の閲覧を許された矢数道明氏と東京大学医学図書館に厚く感謝申し上げます。

注

- (1) 岡田靖雄によって同文庫の目録が編纂されており(『東京大学医学図書館所蔵呉秀三文庫目録』『日本医史学雑誌』二八巻四号、一九八二年)、該門人録も「66、吉益家門人録 二冊 写本」と著録されている。
- (2) 「奥田本『東洞先生門人帳』」「奥田本『南涯北洲先生門人拔萃録』」「漢方の臨床」三五巻八・九号、一九八八年。
- (3) 「深川本『吉益南涯門』」(1)(2)(3)「漢方の臨床」三五巻一〇・一一号、一九八八年、同三六巻四号、一九八九年。および「目でみる漢方史料館」(12) 吉益家門人録二種―「奥田本」「深川本」―「漢方の臨床」三五巻八号、一九八八年。
- (4) 『京都の医学史 資料篇』一三二頁、思文閣出版、一九八〇年。
- (5) 山辺監司は播州出身で越後高田侯に仕えたため、越後と播州に重出している。
- (6) 出身地を以てせず住所をもって配当している例があり、出身地を併記しないため、住所が生国のように見える場合がある。例えば奥田本東洞門126番の別所伯貞は、奥本によれば浪華の人で江戸住だが、奥田本では単に武州に配当されている。
- (7) 奥田本未収者は奥本80・87・189・194・245・285・323・325・342・375・383・430・460・501・511・516の一七人。
- (8) 「天保癸卯之秋七月廿日 於洛東華頂山下袋街弄月亭而写之 常陽後学奥田鳳作 夫此書也者実吉益家之秘藏也 固不許他見也」。「目でみる漢方史料館」(12) 吉益家門人録二種―「奥田本」「深川本」―「漢方の臨床」三五巻八号、一九八八年を参照のこと。
- (9) 地域別門人録に先立って入門時順門人録が作成されたことは言を俟たないが、両門人録の表現の上から、両資料の成立

時期、前後関係を示すものを挙例しておく。奥本東洞門では5加藤龍円・6石川淵平らの住所表示は「今居于——」とあるが、奥田本では「其節居——」とある。同じく4和田泰純は奥本に「事于高槻大江侯」とあるが、奥田本では「今在京都」とある。奥本北洲門18諸角道輔は奥田本では「死」の追記がある。いずれも地域別門人録の後出を傍証するものである。

(10) 矢数道明「東洞門人録中の中神琴溪」「漢方の臨床」一九卷五号、一九七二年。矢数は奥田本の記載により中神琴溪を東洞晩年の門人としている。

(11) 矢数による翻刻がある。「多紀元堅門人録」「漢方の臨床」四二卷一〇号、一九九五年。「多紀雲從門人録について」「日本医史学雑誌」三四卷二号、一九八八年。収録人数は菑庭門五九五入、雲從門一九五人。

(12) 『東洞先生遺稿』巻中所収の門人帰郷に際しての送序七篇(①山辺礼助一呉44、②中村士亨一呉38、③河村志生一呉49、④神原子藏一呉83、⑤小谷子蕪一呉76、⑥南元珠一呉73、⑦長田君玉一呉84)のうち、②③に従学期間三年の記載がある。

(13) 寛政三年とするのは次の諸文。呉秀三『東洞全集』(既出)一〇二頁。中野操「大阪の吉益家について」「漢方の臨床」一七卷一、二号、一九七〇年。杉立義一『京都の医史跡探訪』思文閣出版、一九八四年。

南涯四十三歳の年(すなわち寛政四年)とするのは次の諸文。吉益周助「吉益南涯先生略伝」「医史料」七号、一八九五年。富士川游『日本医学史』一九〇四年。呉秀三『東洞全集』一九一七年。竹岡友三『医家人名辞書』一九三二年。

呉は「寛政三年(年四十三)」と記しているが、呉自身記すごとく南涯の生年は一七五〇年であるから、この記述は正しくない。寛政三年ならば年四十二であるべきだし、年四十三ならば寛政四年とあるべきである。寛政三年とするものは呉以前になく、年四十二とするものも従来ない。一方、年四十三とするものは従来多い。よって寛政四年帰京を是とする。「(14) 吉益周助「吉益南涯先生略伝」に「年四十三大坂僑居ヲ弟辰ニ譲リ之ニ居ラシメ自ラ京ニ皈リ居ラ三条東洞院西ニトリ之ニ移ル」と説き、前記の諸文もこれに依る。

(15) 中野操「大阪の吉益家について」(既出)および古西義麿編『大坂医師番付集成』(思文閣出版、一九八五年)による。『集成』の①(寛政末年頃)に「東方大関 本天満 吉益掃部」、⑤(寛政末年頃)に、「西方関脇 元天満 吉益掃部」、⑧(文化末々文政初)に「古方家 本天マ 吉益掃部」とある。ほかに④(寛政末年頃)「東方大関 元天満 吉益周介」と③(寛

政末年頃「東方大関 伏見町 吉益掃部」とあるものがあり、特に後者は単なる番付の誤記であるのか、或は番付板行年の誤認であるのか、或は何らかの理由あつての記載であるのかは後考に俟つ。

(16) 文化三年「大坂入門」七人、文化十四年「浪華社中」二人、以上の九人は深川本にも収録されている。或は後者は大坂吉益掃部塾から京都塾への転塾を意味するものか。

(18) 呉本の文化十年入門者三九人(北洲門1~39)に深川本にのみ載せる「沢田貞蔵 文化十年七月」を加えた人数。

(19) (18)に既記の沢田貞蔵・文化十年七月のほかに、豊島林蔵・文化三年四月、森寛太郎・文久二年、山田厚三・文久二年の計四人が深川本のみ所載者。

(20) ここにあげた東洞・南涯門の年平均入門者数は、グラフ化の際に採用した東洞門五四三人、南涯門一三七〇人を考察対象とした時の結果である。(表1)の右欄にあげた合計数よりも奥田本のみ所載者の分だけ少ない。この全合計数によって年平均入門者数を求めれば、東洞門一八・七六六人、南涯門三四・三八八となる。

(北里研究所・東洋医学総合研究所医史学研究所)

補記

拙論脱稿後、岡田靖雄氏架蔵の呉秀三手訂「吉益東洞先生」を閲覧する機会を得た。大正七年吐鳳堂刊『東洞全集』巻頭「吉益東洞先生」(一四〇頁)部分の別刷で、『全集』所収の呉序とは別の大正七年一月の呉の序文があり、凡例・目次も『全集』と異同がある。本書にある呉の書入れによって、拙論であきらかにできなかった鶴田元逸の生没年と家系が判明したので、岡田氏に深謝しつつ、ここに補記しておく。

鶴田冲(一七二七~一七五六)元逸の他に元偲とも字した。家祖は獅子岳城主・鶴田越前守。祖父は鶴田精(号は省庵)。父・鶴田忠(号は松山)の三男である。兄は鶴田寛(号は平山)。支族・鶴田近の養嗣子となり、京都の吉益東洞に従学後、帰郷して宝暦六年十月十七日、三十歳で没し、中多久の白檜(撰分)に葬られた。

On *The Annotated List of Students of Yoshimasu Private Medical School*

MACHI Senjurô

Yoshimasu Private Medical School was founded by Yoshimasu Tôdô (1702–03), an important medical theorist in Edo Japan. His student, Tsuruta Gen'itsu, began compiling *The Annotated List* of Students of Yoshimasu Private Medical School. In this paper, I first compare various extant texts of this book. I show that the one originally held by Kure Shûzô (presently held by the Medical School Library of Tokyo University) is superior to the other two texts held by Yakazu Dômei. The first text gives information about a larger number of students than the last two, and each entry in the first text is more detailed and accurate (chapter 2). Then I transliterate the handwritten preface of this book (*Tsûshiki jo*), written by the compiler, into modern block printing, translate it into contemporary Japanese, and annotate it (chapter 3).

Furthermore, in chapter 4, I analyze the development of the school. In order to do so, I first gathered, from other sources, information about students who do not have entries in *The Annotated List*. Then I discuss unusual patch-works and corrections in the section “Students of Yoshimasu Nangai” and present my interpretation of what had really happened. Finally, I show in a graph the number of new students every year, and also indicate in a chart where the new students came from every year. I conclude that the largest number of students entered the school in 1806, and about a decade around this year was the peak of the school. Also, the majority of the students came from Kinki, Chûgoku, and Chûbu areas.